



「沈黙の医療戦士——医療技術者の実態と役割」

日本医療技術者団体連絡協議会編

本書は日本医療技術者団体連絡協議会加盟8団体の代表が分担執筆して、各職種の業務内容と医療の中に於ける役割を紹介し、またそれぞれに抱える教育・身分・保険其の他の問題と将来の展望について述べたものである。

第1章では日本の医療の持つ古い体質を鋭く批判し、チーム医療確立の為にという立場から医療技術者の教育と数について、統計を駆使して問題提起をしている。

第2章（放射線技師）では、職制（医師が放射線管理者）と、撮れば儲かる現行保険制度を批判すると共に、技術者自身のあり方について自戒し、また放射線専門医充実を主張している。

第3章（臨床検査技師）では、技師法制定とその改正までの経過、検査精度の向上の為の努力について詳述している。

第4章（栄養士）では栄養指導料点数ゼロの現在、専

門知識の充分生かされない悩みを訴え、また免許取得の幾つかのコースについて触れ、学卒無試験免許取得者が多い事から来る問題点をも指摘している。また給食下請化、冷凍食化の傾向に警鐘を鳴らしている。

第7章（歯科義工士）では歯科医師との関係、保険の矛盾、専門職としての職業倫理を強調している。

第8章（歯科衛生士）では本来の業務の予防よりも治療部門で働かざるを得ない現状を述べると共に、個人を対象とした医療から社会を対象とした医療を指向する立場を主張する。

PT・OTについても業務内容紹介、問題点の指摘にとどまらず、其の対策についても具体的な提案がなされている。我々はそれらについて深く考える必要があろうし、またその時他の職種の人達が歩んだ歴史と努力の跡が多くを示唆を与えてくれるであろう。

（国立身体障害センター、理学療法 鈴木正彦）

「Understanding Paraplegia」

by J.J. Walsh

この本を私が初めて手にしたのは、4年前卒業研修で豪州に留学中の時だった。街頭の書店で何気なく手にして、先ずその文章の簡潔さと平易さがすっかり気に入ってしまい、不得手な英語の勉強も兼ねてという軽い気持ちで買い求めた（きっと肩を張らないで読めるという点も魅力だったのだろう）。著者は脊損のリハビリテーション（以下リハと略す）のパイオニア的役割を果たして来た英国 Stoke Mandeville の国立脊損センター現所長の Dr. J.J. Walsh であるが、脊損患者（特に対麻痺）の持つ様々な問題を医学的面的のみならず、社会的な面にまで波及させ、専門家は言うに及ばず素人（患者自身やその家族）にも分かり易く説明してある。この点は、著者の長年に渡る経験と患者に対する深い愛情とを如実に示すものである。元同センター所長の L. Guttman 博士は、この本の序で、脊損患者のリハを成功裡に導く秘訣は、障害を有する患者自身に、複雑多岐にわたる問題を如何に理解せしめるかにあると述べている。Walsh 博士もまさにその点を障害管理という観点から病院、施設

は言うに及ばず社会復帰後も必要であると明確に述べている。

この本の内容は21部に分けられ、対麻痺の病理、解剖、病因に始まり、初期治療、皮膚管理、膀胱管理、性の問題、車椅子、自動車等の移動機関、医療スポーツ、更に就職に於ける問題と多分野へ展開している。特に皮膚管理や性の問題は他書にない患者を土台とした具体的で実践的な点が印象的である。全体を通してこの本の根底にある著者の考えは、患者自身の立場に立って、患者の理解に努める事が患者をして障害克服へと導く為に如何に重要であるかという点である。日常の業務に追われて、ともすると治療者本位の立場となってしまう、肝心の患者との話し合いを忘れ、いつしか患者を蔑ろにしがちな我々にはチクリとさせられる警告とも感じとられるのは私一人だけだろうか？是非一読をお勧めしたい書である

（Tavistock Publication, 1964）

（九州リハビリテーション大学校、理学療法士 嶋田智明）